

実践女子大学文芸資料研究所蔵『思案閣女今川』翻刻と紹介

松原 哲子

『思案閣女今川』は、明和四年（一七六七）鱗形屋刊行の初期草双紙である。実践女子大学文芸資料研究所本の他に、大東急記念文庫本と大英図書館本が現存する。大東急記念文庫本については、『大東急記念文庫善本叢刊 第四卷 赤本黒本青本集』（昭和五十一年、汲古書院）に影印が紹介されている。また、作品の構成や趣向の典拠については、長谷川強氏『浮世草子新考』（平成三年、汲古書院）によって明らかにされており、作品の評価もなされている（注1）。まず、実践女子大学本の体裁について簡単に紹介すると以下の通りである。

巻数・冊数・丁数 三卷三冊。十五丁。

表紙 元のもの。黒色。

題簽 完備。書名「思案閣女今川 上（中・下）」。紅色の料紙の外題簽と白色の料紙の絵題簽とを組み合わせた二枚題簽様式。書名の上部に「新板」とあり。絵題簽中に「今川 上（中・下）」と抄録書名あり。絵題簽

は上巻が四丁裏・五丁表、中巻が十丁裏、下巻が十五丁裏の場面からそれぞれ採っている（図1～3参照）。

柱刻 「女いまかわ 壺（二～十五）」

刊記 なし。ただし、『音曲／妖道成寺』所収の「亥正月新板目録」（「板元／鱗形屋孫兵衛」）に本書名が掲載され、この目録に掲載される作品の現存題簽が全て同体裁で、他と異なることから、この年の刊行と推定される。また、目録に掲載される画工の鳥居清満・鳥居清経・北尾重政の活動時期からこの亥年は明和四年を指すと判断される。よって初摺本の刊行は明和四年、実践女子大学本は装丁から判断して、それよりも下った時期の刊行と推測される。

画工名 五丁裏・十丁裏・十五裏「鳥居清経画」

板元名 先掲の新板目録や、各巻初丁の匡郭上部および各巻外題簽の書名下部に円に三鱗の商標があることから鱗形屋。

実践女子大学本の最大の特徴はその装丁にある。大東急記念文庫本・大英図書館本の二点は共に黄色表紙の青本体裁に、青色の料紙の外題簽と紅色の料紙の絵題簽を伴った、初摺本の装丁である。それに対し、実践女子大学本は黒本体裁となっている（図1～3参照）。本の状態から判断してこれは元の表紙であり、また題簽の料紙の色の組み合わせが紅色と白色の組み合わせになっていることから、実践女子大学本は再摺本であると判断される（注2）。

初期草双紙は、元の表紙や題簽を欠くなど、現存資料の状態が良好でない場合が多い。『思案閣女今川』は青本と黒本の両方の体裁が現存する稀少な例であり、板元による草双紙の刊行の実態を明らかにしていく上での重要な判断材料となる。既に影印での紹介がなされている大東急記念文庫本は上巻の下題簽と中巻の絵題簽のみを残している本

である。また、大英図書館本は初摺本で元表紙・題簽を完備しているが、在外資料のため閲覧が容易ではない。そこで、本稿では再摺本ではあるが元題簽を完備している実践女子大学の、各巻表紙部分を紹介するものである。

作品の内容については、先に挙げた『浮世草子新考』によって典拠が明らかにされ、作品の位置づけなど詳細な検討がなされているが、その主な指摘を挙げると以下のようなになる。

一、『思案閨女今川』は、作品の筋、登場人物名、本文の詞章の共通性などから、正徳三年（一七一三）正月刊行で、江島其磧の作と推定される浮世草子『鎌倉武家鑑』に依っている。『鎌倉武家鑑』の改題本に『今川当世状』があるが、題名の類似性や浮世草子の伝存から考えて、本書は改題本に取材したものと推定される。

二、物語の筋の内、『鎌倉武家鑑』には無い七丁裏・八丁表の、声色をかわせ、閉門中に職人を入れる場面は、正徳年間刊行の浮世草子『名物焼蛤』巻三の一「物真似不思議男」および同二「当眼に恋の閉門」に取材している。

三、『鎌倉武家鑑』で今川俊秀となっている人物が、『思案閨女今川』は今川仲秋となっているが、これは享保期以降浄瑠璃や歌舞伎で頼兼・仲秋が多く登場するようになったことを考慮したもので、演劇種の草双紙として通用することを狙ったものと推察される。また、やはり『鎌倉武家鑑』には無い、三丁表からの狐狩の一件は安倍保名・清明の葛の葉説話に依っているが、これもまた明和期の演劇に影響を受けたものと解せる。

長谷川氏は以上のような傾向を踏まえた上で、本作品は、浮世草子が作品の構想に大きく関与しながらも、歌舞伎を愛好する読者の関心にうったえ、当時上演された演劇の趣向をはじめ込むことよって演劇界・芸能界の動きに応じようとしたものである位置づけている。

初期草双紙と浮世草子との関係については、長谷川氏をはじめとするこれまでの研究において既に多くの指摘がなされている。それを概観してみると、初期草双紙の浮世草子摂取は、紙幅の許す限りで作品全体を抄録する方法や、

部分的に浮世草子の一部を趣向として取り入れる方法など、様々である。抄録的作品のほとんどは十丁、十五丁といった限られた紙幅の中に収めるために、典拠とする文芸の物語の筋や登場人物を取捨選択し、簡潔化している。また、同時に典拠にない物語を部分的に付け加え、ひとつの作品として読んだ場合に矛盾がないよう工夫がなされる場合もある。一方、演劇的要素や流行語など同時代的な事柄を部分的に取り込むことによって、その年の「新板」としてふさわしい作品作りがなされていることも多い。これらの傾向はまさに『思案閣女今川』にみられるものであり、本作品は初期草双紙の典型的な作風を示しているといえる。

ただし、管見の限りの初期草双紙と比べてみると、本作品は急ごしらえの印象を受ける。

まず、登場人物のせりふを追ってみると、例えば一丁裏・二丁表の久国の指示の下で夫夫が大石を引く場面では、彼らは「つゆの玉やの新兵衛がよいやな」「やれハア たんでこへが出ぬぞ」などと、物語の本筋とは関係の無い発言をしている。また、四丁裏・五丁裏では頼兼の取り巻きである座頭が「こゝらの仕だしは大たにの十町でな」、彦作が「五郎までやいあさひなが一ばんとめたとまれくやい」、久国が「つぎは長太郎やうしや」などと、やはり無くとも物語の展開に差し障りの無い発言をしている。これらのように、物語の筋を追うこととは別の興味を読者に与えるせりふを作中に配するあり様は、この時期の草双紙の典型ともいえるべきものである。しかし、その一方で物語の筋に乗っている、主要な登場人物のせりふが少ない。前述のように、初期草双紙は限られた紙幅の中で物語を展開していくため、地の文とせりふのそれぞれに必要な情報を振り分けて配していく場合が多い。しかし、本作品の場合、登場人物の語りによって物語を展開させる場面があまりみられず、ほとんど地の文によって物語が進行しているために、単調な印象を受ける。

また、二丁裏の、久国の「につくいかすぼうずめ」というせりふは、画面にまだ余裕があるので、もっとふさわし

い配置があつたようにも思えるし、五丁裏にみえる、頼兼の「今川たまれすいさんな なかあきめ」、仲秋の「わが君それは御なさけない 御心をひるがへし給へ コレサ わが君よりかね公」というせりふは、地の文と一体化してしまつており、読み易さを意識した丁寧な配置とはいえない。

挿絵の構図についても同様のことがいえる。本作品のような抄録物の草双紙は限られた紙幅の中で複雑な物語を展開していくことになるので、見開き一面を分割し、半丁毎に場面を展開することが多い。本作品でも前半についてはそのような場面割りがなされており、その点は何ら他の抄録的作品と傾向が異ならない。しかし、本作品の後半特に十一丁裏以降を目で追つてみると、見開き一面の余裕のある場面であるにも関わらず、地の文によってのみ物語が展開されている。このような紙面の作り方は、書き入れと挿絵との相乗効果を狙つた工夫がなされていると言ひ難い。

この『思案閣女今川』のあり様が、この時期の鱗形屋板全体にいえることなのか、それとも本作品に限つたことなのかは未確認であるが、毎年十四作品を新板目録に列挙していた鱗形屋の、板元側からの何らかの働きかけが作者や画工にあつた結果なのではないかと想像される。

今後、鱗形屋の同年刊行の他作品との比較や、年代順に草双紙の構成の傾向をみていくことによって、この問題は明らかになっていくと考えられる。今後の課題としたい。

注1 三三七頁〜三八二頁「草双紙と浮世草子―黒本（出雲）芝居始」『思案閣女今川』について―

注2 鱗形屋板草双紙における初摺本と再摺本の体裁の違いについては、拙稿「鱗形屋板題簽考」(『近世文芸』第

八十七号、平成二十年一月、日本近世文学会) 参照。

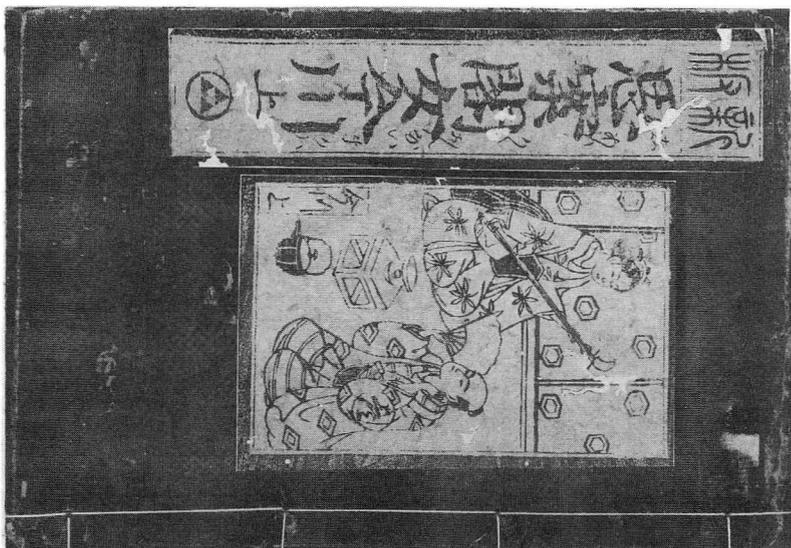


図 1 上巻表紙部分



図 2 中巻表紙部分



图 3 下卷表紙部分

『思案閣女今川』翻刻

文節・文の切れ目に適宜空白を入れ、登場人物のせりふについては各々（）内に話し手を示した。なお、（）内の登場人物名については『鎌倉武家鑑』を参考に、適宜漢字表記とした。

上巻

(一丁裏)

そのかみ あしかがたか氏の御すへ よりかね公と申て そのころのふ将にておはしけり しかいせいひつにおさまりしかば たのしみにほこり おごりをつくしませ給はず ちうや御酒ゑんにふけり給ふ 代々の御かしん今川とねりの介りやうしゆん 此事をきのどくに思ひ ぐそくなかあきにせいしのでうくをいましめて 一くはんをあたゆる 又此今川がいへの子に こじま平六左衛門というふものがおもて なかあきのかほにすこしもちがはず そもくりやうしゆん此一くはんをつゞりしかさくをしあんかくといふ

(二丁裏・二丁表)

そのころ やまなしひうがのぜんじ久国といふ物有 もとはわづかのさむらい也しが 小ちさいかくを以て よりかねの御心にかない だんくくと御取たてにあづかり立身せり あるとき水もんのわきに見事成大せきあり これをつき山へうつさんとし給ふに 中々の事にてはかないがたし 久国此義をうけ給はり しほのそこりを見すまし 大つなを付おき まい日そこりにひきいだしけるに なんのぞうさもなく事じやうじゆせり 君久国がちゑをかじ給ひ これよりいよく御きに入しとぞ

又こゝにやましろのぐんりやうとて 御母かたのおぢ有 七十才におよびて心のそこいつめたく 何とぞよりかね
をなきものにして よをうばわんとたくまれけれ共 さしあたりてたのむそうだんあいてもなくして 月日をおくら
る 久国こそよきさうだんあいて かたうではと 此ときより思ひつかれけるこそ その身をほろぼすたねとはなり
けり

(人夫一) つゆの玉やの新兵衛がよいやな

(人夫二) そこらでわかいしゆたのみます じのわりとヤアしめろの

(人夫三) やれハア たんでこへが出ぬぞ

(二丁裏)

みやこ三でう通に大和やそう久とて大かねもち有 かねてごをうつ事をこのむ 久国心に一物有ば これにたより
て金をかりかけんとする そう久もとよりしあんふかきものなれば 中くくとくしんせず かへつて久国をはづかし
めける

久国 につくいかさぼうずめ いずれは此しりをもつてゆかんと とし月こゝろがけける はたしてのちにみしら
せける

(三丁表)

久国がすゝめによつて きつねのいきぎもとりて さげにまぜてすゝめ奉らんとするにとりゑず 久国みづから
ふかくさのへいで きつねをとらへころさんとするに きつね人げんのことばをなし たすけ給へといふにきゝ入らず

ついにきつねころされぬ

夫より よりかね公此酒をきこしめし 御心するどくならせ給ひ 御手打にあふもの あまた有ける

(三丁裏・四丁表)

久国きも酒をしたゝめ ぐんりやうにわたさんとぢさんする所に まつよひといふ女中 何心なく此所へきかゝり
はしめおわりを立ぎく 久国兩人なむ三ぼうと思ひしが さあらぬていにて まつよひをすかしよせ たゞ一かたな
にきりころして つき山のうちへうづめける 此女はもとわたなべがかんじやに入レおきしものなりしが これをば
しりてやよろしけん 又事を立ぎ、したるばかりにてころしけるか いぶかしく

ぐんりやう兩人あたりを見て くだんの酒をたづさへ行給ふ 久国したゝかもの也ければ あたりに人のおらぬを
さいはいに よきおりからとうしろよりなんのさうさもなく ぐんりやうを二つにぶちはなし 同つき山の下へつき
こめしは さてもおそろしきたましいなり げにや らうあく久しからずしてほろぶとは かゝる事をやいふらん
ぐんりやうの身の上よしなきくはだてして いのちをうしなひけるかな

(四丁裏・五丁表)

久国御おぼへことなりければ ほうばいのそねみいかゞと 御ことはり申てひつこみしを すこしもくるしからず
まかりいでよと いやく御きげんうるはしく見へし 今はよきおりからと思ひ ふし見のしゆもく町にて なだ
のゆうぢよ今川といふけいせいを御酒の御あいてにいたす もとよりうつくしきものなれば 御きに入よねんなし
今までかゝるおもしろき事をしり給はぬ大将なれば さも有べし にちや酒ゑんにけうじ給ふ

けいこさとうのさみせんおもしろく かぶきやくしやのこはいろといふもの御きに入れる 四でうかぶきしばいの
へんにて もんさくになをゑし とり屋ひこさくといふもの たれ人のこわねにてもまねぬといふ事なし 久国此も
のをたゞなくこまつけ たれかれのこはねをまねよと 道にすこしもちがいなし

(座頭) こゝらの仕だしは大たにの十町でな

(彦作) 五郎までやいあさひなが一ばんとめたとまれくやい

(久国) つぎは長太郎やうしや

(五丁裏)

よりかね公ほういつの御身もちゆへ なかあき御いさめ申て 父がけうくんの今川状をよむ

一 ぶんとうをしかすして ぶとうついにせうりをゑざる事

一 しゆゑん ゆうきやう しやうぶにちやうし かしよくをわするゝ事

(頼兼) 今川たまれすいさんな なかあきめ

(仲秋) わが君それは御なさけない 御心をひるがへし給へ コレサ わが君よりかね公

鳥居清経画

中巻

(六丁表)

今川なかあきしせつをわきまへず 御いけん申事ふとゞき也とて へいもん申付らる その上りやうしゆんがで

うくくの一くはんさし上よとの御つかいをうけ給はり きれいの兵藤太まかりこし かゝるときに くだんの一くはん何もの共しれず まへのよぬすみとる

(仲秋) 此申わけたちがたし

(六丁裏)

一くはんをさし上る事おしむよしにて いやく御いきとをりふかく きびしくおしこめられける なかあきが心の内おもひやられてあはれ也 久国よりいか、思ひけん よなくさまく心をつくせし 酒しよくをなかあきへおくりて 折を見て御かんき御めん給へやうにとりなし申べしと 申つかはしければ さしものなかあき はかり事へのせられ さてはかゝる心ざしふかき人とおもふ

(七丁表)

こしま平六左衛門は いさ、かの事にて なかあきのかんたううけ 此わび事にまいらんと ゆくみちにてふしぎの一くはんをひろいけり いもとがつとめ奉公せしふしみにきたりて しかくの事をいふて 一くはんをわたすいもとの今川あに、あふて ふしぎの事に思へ共 さあらぬていにて 一くはんをうけとり よしなにあいさつせりのちにきけば これぞきやうだいのいとまごひとはなりにけり

(七丁裏・八丁表)

よりかね公 御酒もり月のよには小ふねに召れ みたちのうちそこをなかめ給ひける いざよひのころ いつもの

ごとく すいもんより入せ給ふに 今川がながやとおほしき所にて なかあきがこゑのきこへしこそ うたてけれ
(仲秋の声) さてく心おもしろきへいもんかな 此くらいならば 二三ねんへいもんして心をらくにたのしまば

じゆめうのくすりなるべし

そのまゝのなかあきがこはいろを 彦作につかはせしたくみのほどこそすさまじ

久国まことをつくして よるくしんもつなとおくりければ なかあき心をきなく何事も申のべける 久々のへい
もんの内 水おけ はこつるべなとそんじければ 此つころひなと申つかはす 近日だいく おけやをつかはすべし
とこたへけるおりふし そのよふけて おけや 大工 くはたひしとた、きたてるおとしてければ あれは何もの、
長屋そと 御たつね有 久国をはじめ つきそふ人々御こたへ申さす よりかね公がてんして かへらせ給ふ

(八丁裏)

へいもんの内 しゆじんをないかしろにせしなかあきがふるまひ そのつみかろからず これによつて 此うつて
として わたなへみんふはやともうけ給はり 今川にかくと申わたす かゝるおりふし こじま平六かんだうのそせ
うに来るかほを見れば なかあきにおもてふりを二つ也 わたなへは物かけよりとくとみすまし 平六にあふて心さ
しをきく 平六も此たびの事そんじ 御身かはりにたらんと悦ぶ

(九丁表)

わたなべかねて今川がつみなき事をさとり これみな久国かかんけいより出し事なれば 何とぞ仲あきがいのちた
すけ度 平六かんだうゆるされてよろこび すぐにせつふくせしを くひうつて仲あきがくびといつわりちさんする

今川のかしん あまた有中に 此わたなべは仲あきと いったいふんじんにして 忠をはげみける事 よりかね公の
ちにぞ思ひあたらせ給ひける

(九丁裏・十丁表)

さても山なし久国は 此とし月かんけいをめぐらし くん用金をたくはへける しかるに 心にかゝる今川仲あき
をば おもひのまゝにうちほろほし じぶんよしと かねてのいちみのあくとうをあつめ 内ぐらにこめおきたる金
子を取出し かんぜうして見るに 一万四五千両になりぬ ぐん用金かねては二万両とこゝろかけ むりひどうをは
たらき くすねためけるが いまだ思ふほどにはたらず 久国がかたうでとたのみたるくれない兵藤太そろはんして
ねがわくは今三千両たらず 此金くめんには かくのことはからい給へと みゝに口をよせて申 久国きいて め
うけいゝとほめる さてしも久国かかねたくはへについて むりひどうにてころされし男女はいふに及ばず もう
じんその外ちくるいのもうねん 内ぐらにあらわれけれ共 久国何共思はさりし ふてきものなり

(十丁裏)

大和やそう久は ふるどくくずきにて ある時やぶ下をとほる古道具やの見せに 上々のごばんあり ねだんげじ
きにもとめ 此ついでにそでつをもかいとりて 心うれしくひそうせり 其四五日すぎて よりかね公御ひそうのご
ばんふんじつ 此せんぎさびしく京の町 上を下へとかへす

そう久は かいもとめし古道具やを見るに いつしか見せをしまいて 行がたをしらず

下巻

(十一丁表)

わたなべみんふ ひへの山へさんけいして 下かうするとて 白川のへんにて しらいとのたきより けしたる女
 あらはれ みつからは久国にころされ にはのつき山にうづめし まつよひと申女也 久国かたくみ もつたいなく
 も君をうしなはんと いそきほろほし給へと物がたりしてうせける わたなべ きいのおもひをなしてかへりける

(十二丁裏・十二丁表)

けいせい今川は 久国がすいきよによつて 君へなれそめ参らせしか いつわりならぬ御いつくしみ ありかたな
 みたそてにあまり 一つには又 兄こしまが 主人仲あきの命にかわりて ちうしんをつくせし事も申上度おりから
 に よりかね の給ひけるは そちとわれ あさからぬちざりなれ共 かはりやすきは人心 たかいかわらぬ き
 せうせいしをとりかはさんと 御たはむれにの給ふも まことにこひちのな、ひかや

今川 これこそわたりさふねとおもひ みつからがしんじつを御めにかけまいらせんと あにかそんめいにわたせ
 し りやうしゆんの一くはんをひらき 今川状をことくくよみければ さしもの御大将 御心ほどけ これより本
 心と成給ひ こつかのせいたうをた、しく取おこなひ給ふ 恋ゆへ御身もちおろそかになり 恋ゆへ御身もちたゞし
 く成給ふぞ まことなれ 扱もゆ、しきしだいやと みな人かんずる

(十二丁裏・十三丁表)

久国たこく一見と申たて ねかいかない 引こもり いちみをあつめ かねての大もう此時と様々はかり事をなす所に 町人 百しやうはいふに及ばず しよにんのうつたへ ねがいかきをもつて御せんに相つめける くみをこひける中に 大和やそう久 ごばん そでつをもとめし御とがめとあつて 久国はからい さしもうとくなるそう久がしん上 召あげられ 一門しうたんのだんきこした わたなへを第一として 久国をとりこにせんとはつかうせし所にはやさきだつてかせをくらい 金ぎんをいづくへかもちはこび 久国はしゆつほんせり これにいちみせしきれい兵藤太をはじめ あくとうのこりなく しざいをいつしかもちこび のこらずかけおちしける され共 きんごくへ ふれなかし くさをわけてから立御せんぎありければ のがるゝかたなし

(十三丁裏・十四丁表)

きづをかうむる鳥は たかくとべ共ちにおつるうれい有 つりはりをふくむうをは ふかきふちにしづむといへ共ついにあかるわざはい有 さしも いちみをかまへて いつせんに君をうしない奉り 其身天下のぶしやうとならんと しやちかんきよくをもつて すねんかすめ取し金銀をふりすて その身一人馬にまたがり とば おぐるすのかたへ おち行

ひうがのせんじ久国 すねんのせきあく こゝにあらはれ 天にせめられ 池にぬきあしするといふがごとくよをしのび 人にかくれ たきゞをおいてやけのをすぐるおそれをなし 馬をはやめて通る所に すはやおちうどの行ぞとよばゝりしかば 村々よりであいし百姓共 さびたるやり くまで かま とび口なんどもちいれ こゝのはやし かしこのやぶかげより 一度にどつとはしりよる

(追手の百姓一) ソレ そやつやるなく わつかのせいにうしろを見せるか

(追手の百姓二) ひやう者かへせく

(十四丁裏・十五丁表)

これはひうがのぜんじ久国ぞ あやまちするなとことばをかくれば なんどう 其久国めが 此ほどのうらみを思ひしらせよ よくもわれくがたくはへおける米ともを ひやうらうのためそとて むたいにとりけるむくひをしれと 大ぜい ぜんごよりあつまり 馬より引おとし よろひかぶと引むくり あらなはにいましめ 都へや引ん此所へ生なからうづめんと こへくくの、しる

かゝる所へ 人々おいくにつかけ付 中にもわたなべみんな早友 久国を引すへさせ しんべうに召とりたる物かなと なわかけなをし した、かにく、り上 此とし月 我ま、をばはらたきて しよにんにりよぐはい ぶれいをいたし 君をくらしまし いゑをみだりにし 上下万みんうらみをふくむ事 いふはかりなし ふつしんのかうりよはづれ じんほうにそむく あくみやく無道のはちしらす とくくくびをはねて ふちうふきのねいしんの みせしめにせよとなり

(十五丁裏)

かくて 久国がくびを切 六でうがはらにさらしける ごくあく人ほろびて こつかあんぜんにおさまりしも ひとへに今川りやうしゆんが 一くはんゆへなり 又 よりかね公の御身もち むかしのごとく けんごにならせ給ふは 女今川がしきだうよりおこれり しゆにんあいきやうとは まことに此事をやいふべき さるによつて じぢよのし

よがくにとりあつかふ今川状とて
もつはらにもてはやしぬ